

くらし・家庭

少女マンガと ジェンダー

中川 裕美 6

『リボンの騎士』以降、少女マンガでは数多くの「戦う少女」をテーマにした作品が描かれてきた。今回はその一つである種村有菜の『神風怪盗ジャンヌ』(1998年)(表紙)を取り上げる。この作品はテレビアニメ化もなされた。

深い孤独を抱え

主人公の曰下部(よしたべ) まろん(16歳)は普通の女子高生だが、実はジャンヌ・ダルクの生まれ変わりであり、世間を騒がせている「怪盗ジャンヌ」の正体でもある。天使ノインから、魔王が絵画の中に潜ませた悪魔を回収する、という使命を帯びて戦っている、という物語である。(左)

「神風怪盗ジャンヌ」

「戦う少女」と「処女信奉」



怪盗ジャンヌとなって悪魔と戦う少女まろん(『神風怪盗ジャンヌ』©種村有菜/集英社)



まろん(中央のコマ)とジャンヌ・ダルク(『神風怪盗ジャンヌ』©種村有菜/集英社)



種村有菜作『神風怪盗ジャンヌ』文庫版1巻(集英社)

り、転生を繰り返しながら悪魔と戦い続けてきたのだということが明かされる。 まろんの性格は「曲がったことが大嫌い、強がり、得意っばりで気まぐれで泣き虫」とされ、また、深い孤独を抱えているが、その原因が「両親の愛情を受けずに育ったこと」であるとたびたび強調している。「愛」ってよくわからぬ、誰も教えてくれない、誰にも無理だ、お願ひ、私にも無理だ、え、純潔を奪われてしまった、司教と同じく悪魔のついた看守にな

かったもの」といったまろんの孤独は、最終戦においてまろん自身がみずから泣いて「もう泣いていいよ、私、ひとりじゃないから」というセリフで解消される。種村は「戦う少女」を万能の救世主とするのではなく、孤独を怖がる普通の女の子として描いた。この作品が小学生も読者対象とする『りぼん』(集英社)で掲載されたことを踏まえると、「あなたばかりじゃない」というまろんのメッセージには、男気付けら

れた読者も少なくなかったろう。だがこの作品には明らかな「処女性信奉」が描かれていることも無視できない。『神風怪盗ジャンヌ』では「性的に清らかな身体を持つ」ということの重要性と尊さが繰り返し描かれる。中でも「悪魔を封印する力」は「純潔」でなければ使えないとし、まろんはレイプ未遂を、ジャンヌ・ダルクはレイプをされている。(七)

男性優位主義が

このような「純潔至上主義」が、決して身体だけを対象としていないという点もまた重要である。まろんは最終戦の前に、恋人と身体的に結ばれる。そして、「神様以外の人を愛しても心が気高さと誇りを忘れなければ、女の子は誰しも「純潔」のままでいられるものなのね。」「少女」と「純潔」を結びつけ、そこに価値を見いだすというのは極めて偏った男性優位主義であり、そのこと自体女性性への冒瀆であろう。

また『星の瞳のシルエット』(白泉社)における少女たちが「お嫁さん」以外の夢を語ったのに対し、この作品が登場する少女たちが最後に「専業主婦」となる。そこにもこの作品の持つ

強烈的な保守性、男性優位主義がうかがえる。

だがここで筆者は作品や作家を批判したいのではない。少女マンガに限らず、メディアコンテンツは社会全体を取り巻く大きな潮流に流され、あるいはそれを先取りする。すなわち『神風怪盗ジャンヌ』に表れているような男性優位の価値観は、90年代末前後の日本社会の変化を反映したのもとも考えられる。今回は、ゼロ年代(2000年代)に発表された作品を取り上げる。(日本出版学会理事・大学講師)(金曜掲載)